

## 児童文学の八〇年代

藤田 のぼる

1

前回触れたように、一九六〇年前後を起点とし、五十余年が経過した現代児童文学の時代区分として、僕は六〇七〇年代を「第一期」とし、概ね一九八〇年あたりからを「第二期」と捉えている。(そして、二〇〇〇年代後半あたりから「第三期」が始まっていると考える。)

この一九八〇年前後を現代児童文学の大きな転換期とする説は、僕だけのものではない。というより、批評の世界ではかなり一般的な見方といってよいかもしれない。宮川健郎は『現代児童文学の語るもの』(NHKブックス、一九九六)の第五章「箱舟」のなかでむかえる死——那須正幹『ぼくらは海へ』(一九八〇年)からはじめてで、まず石井直人の「一九七八年変質説」を紹介する。石井がこの年を児童文学転換の年と捉えているのは、二つの作品の出現によってであり、一つは「ズッコケ三人組」シリー

ズの第一作『それゆけズッコケ三人組』(ポプラ社)、もう一つは両親に置き去りにされた兄弟の姿を描いた、国松俊英の『おかしな金曜日』(偕成社)である。この説を引きながら、宮川は次のように述べる。

私自身は、一九八〇年を現代児童文学の変わり目と考えている。八〇年は、那須正幹『ぼくらは海へ』、柄谷行人「児童の発見」、那須正幹『ズッコケ大戦』、矢玉四郎『はれときどきぶた』、フィリップ・アリーエス『〈子供〉の誕生』が発表された年だ。(発行所など略)

そして、現代児童文学の成立を支えた三つの問題意識、「子どもへの関心」「散文性の獲得」「変革への意志」のうち、「子どもへの関心」「変革への意志」というモチーフが「明らかに変質、崩壊しようとしていた」と説く。

また、佐藤宗子は、『少年少女の名作案内 日本の文学